

「使える外国語」運用能力向上の方法

植 田 均
Ueda Hitoshi

0. 外国語教育30年

今や中国の大学では、1年以上の留学経験が無いと専任教員として採用されないようになってきている。日本でも最近では外国語科目担当教員については同様のことが言える。しかし、筆者は留学経験が無い。筆者の専門は中国白話小説などを用いた「中国語語彙史」研究であり、オーラル・チャイニーズはさほど必要ではなかったからである。それに、筆者が学び始めた30年前は、「中国留学」は夢物語であった（国交回復の1972年に筆者は中国語を学び始めた）。

今日の話の標題は「使える（＝効果のある）外国語向上の方法」である。筆者はこれまで大学などで中国語を30年ほど教えてきた。最初は無我夢中に教えたが、そのうち、徐々に「どうすれば上達するか」が筆者の中で整理されてきた。これを開陳したい。

1. 外国語学習における基礎・基本の大切さ

人によって外国語習得の目的、考え方も異なる。文学に興味があったり、またはビジネスに興味がある人もいる。また、言語、外国語に「向き、不向き」もあるだろう。このような中でも相対的に言って、内向的性格よりも外向的性格の方がよいであろう。つまり、母国語でも社交的で、気軽に人とよくしゃべる人がよい。

今、極端な例（A）、（B）を挙げる。（A）は、日本国内で一般の中国人（又は中国人留学生）に中国語を習って、「辞書を引く習慣」も無い。ただ実践でやるのみ。または、高校を卒業して、いきなり留学する人もいる。つまり、基礎となる「発音のしかた」や「文法の説明」がうまく聞き取れなくて、「とにかく実践で」というやりかた。この留学も1年か2年間で帰国してしまう。

もう1つの（B）は、最初、本国人の専門教員によって「発音、文法」をきちんと説明してもらう。時々、外国人の教員に「発音」の矯正や「文法」その他、表現上の訂正をしていただく。つまり、1年間～2年間、基礎訓練を徹底的にやる。柔道でいう「型」を完全に身につける。

このように、異なる2種類の学習方法（A）「最初から実践型」と（B）「最初は基礎訓練型」が巷間では行われている。（A）、（B）2種類の人間に接触したとき、最初、（A）のレベルの高さに驚かされる。なぜか？

（A）のやり方は、実践である。実践とは、「外国語学習」の上において「教室外に必ず相手がいる」ことを指す。相手がなくて「1人で外国語訓練をする」のはむしろ（B）に入る。

（A）は、必ず「相手」を意識しての訓練である。ゆえに、笑顔を見せたり、「意味の無いことば（しかし、必要なことば）」を投げかけたりするのである。

中国語の“今天很热。”を日本語ではどう表すか？

(A) : 「今日はとっても暑いですねえ！」

(B) : 「今日はとても暑いです。」

(A) はこなれた日本語の印象、(B) は直訳的である。

我々が耳で聞いて (A) の方がレベルが高いとすぐを感じる。しかし、3年～5年後になると (B) の「基礎訓練の徹底」を経験した人の方が形勢逆転する。

(B) の方法：1年間～2年間、発音・文法を徹底的に学習する。特に発音は最初の1ヶ月～3ヶ月が極めて大切である。発音を聞けば、その人の外国語能力がわかる。まずい発音は聞きづらい。(「聞きづらい!」と、筆者は相手が話をしている途中で制止した経験がある)。

(A) は、「コミュニケーション・アプローチ」で自然なコミュニケーション能力の育成を目的とする。これは、習慣形成理論を採用せず、仮説検証理論などにより学習過程での「試行錯誤」を重視する。したがって、「いきなり留学」も含まれる。「繰り返し練習は単調で、無味乾燥、煩雑な文法を嫌悪する」という理由で留学する。しかし、1年間～2年間の留学では、結局はブロークンでしかない。

(B) は、「オーディオリンガル・アプローチ」で、習慣形成理論を採用する。CD付きのテキストなどでの徹底した「暗記」である。アメリカの外国語学習理論では、既に「古い」方法であると位置付けられている。

私自身は (B) を行い、留学の経験は無い。しかし、目的を持った渡航により中国の様々なことを体で経験した。即ち、(B) から入り、(それで終わるのではなく) 次に (A) へ移行するのが良い、と考えている。

2. 外国語学習における基礎力のつけ方

今年(2007年)4月に「初めて中国語を学び始めた」学生が、6月下旬に本学で実施した「中国語検定試験」3級に合格した。この試験は準4級から1級まで全部で6段階のレベルがあるが、その真ん中の3級を獲得した。このスピードは全国でも1位の記録ではないかと思う。普通は2年くらいかかる(中国語科などのように、たとえ専攻生であっても2年間くらいで取得するのは、まだ良い方である)。彼は所謂「帰国子女」でもなく、生活環境に中国の人々がいつも存在する訳でもない。4月から筆者が直接指導したため、その上達の具合が目に見えて伝わってくる。

筆者が平素言っている「学習法」を彼は素直に実行した奇々な人物である。彼が実践した学習法をここに紹介する。

2.1. 学習前の大切なこと

学習を開始するに当たり、「何のために学ぶのか?」、「1年間でどの程度まで到達できるのか?」、「将来の進路は具体化できているか?」を定めるようにしたい。

(1) 学習目的の明確化

学習目的を先ず明確にしておかねばならない。彼の場合は「中国語能力を貿易商として活かしたい」であった。

彼が住んでいる東大阪市は中国人が極めて多い。電車にも、また、街中にも中国人に出くわすことが多い。彼の希望は「中国との貿易商で両国間を往来する」こと。

(2) 学習目標の具体化

彼の目標は「1年間で『中国語検定試験準1級』に合格する！」

大学は一般に「4年制」ゆえ、就職するまで4年間の余裕がある。しかし、彼は「この1年間しかない！」と、自分を追い込むことにより、平時でも緊張状態に置いた。

(3) 職業意識の明確化

彼のイメージする職業は「中国ビジネス関連の貿易商、トレーダーになる！」

職業が決まらなければ、「何をして良いか」わからず、青年達は悩む。学生時代は職業が決まっていないから、(多くの可能性もあるのだが、逆に何をして良いか分からず) 時間があり余り、悩んでしまうのである。そして、回り道をする。また、変な方向へ進んだりする。異性を追いかけてたりもするかもしれない。しかし、職業が(心の中で)決まっていれば、もう余計に(無駄なことに)悩むことはない。それ(目標)へ向かってまっしぐらに進むだけだからである。

2.2. 学習上の大切なこと

(1) 講義を受ける

【1】：「発音の良い」、「歯切れの良い」教員に習わないといけない。

学ぶ外国語の発音が方言訛りの強い教員に習うと必ず悪い影響を受けてしまう。その結果、幸いにも後で修正必要と自覚した場合、その修正に約2倍相当の時間がかかることになる。したがって、学んだのが2年間ならば、その修正には4年の歳月を費やさねばならない。尤も、現在では、DVD、CD、VTRなどを利用できるので、改善はされてきているが。

【2】：学生は、授業中「集中」すべし。

その場で理解し、覚え、掌握すること。「後で覚えよう」というのは間違い。後では、必ず曖昧になってしまうからである。そして、分からない点を1日たりとも放っておかない。彼はこれを実行した。

【3】：毎回1課づつの暗唱を(講義の最初でもよいから)意味も考えながら必ず行い、その都度担当教員の指示を仰ぐ。

この「担当教員の指示を仰ぐ」というのは、非常に大切である。例えば、CDなどで独習、または、TV、PCなどのビデオでの独習は、効果が余りでない事が判明したからである。週に何度かは、「担当教員の指示を直接仰ぐ」のが効果抜群なのである。この実験をNHK・TVが『脳の驚異』の表題だったか、定かではないが放送しているのを筆者は偶然見た。結論は、「TVの学習講座」学習法では脳の反応が悪い点が証明されたのである。これには非常に驚いた。筆者が平素学生達に言っていることだったからである。

(2) 放課後の工夫

放課後は、毎日最少でも30分以上は中国語(外国語)の学習をすべし。具体的には、CDを聞く。聞いて書き取りをする。意味も調べる。自分で声に出して発音する。テキストの本文を暗唱する。

コマ切れの時間を有効活用すべし。電車で家に帰る時や、服を着替えるとき、部屋を掃除するときなど、イヤホン等を利用して聴力を鍛える。

(3) 検定試験過去問題集の活用

「中国語検定試験」の過去に実施された問題を自分で解いてみる。この問題は非常に良質なもので、学習者には

恰好のトレーニング教材である。リスニング用のCDも付いているので利用する。ただし、これらの「過去問題」は、あくまでも【これまで学習した中国語の実力テスト】であって、この試験に合格するための手段・目的ではない。合格を「手段・目的」にしてしまうと、本当の実力が養成されなくなってしまう。

(4) 「中国インターンシップ」への参加

彼は、今回（2007年）7/31～8/15まで中国広東省の郊外、東莞の隣町、観ランヘインターンとして参加した。この点については（「基礎力」ではなく）「実践力」になる。実践力については、次の項で詳述する。

「ゼロから出発して、留学もせず、1年間の学習で【中国語検定試験・準1級合格】」は、彼の大きな目標であった。しかし、その後、1年間の学習のみでは達成できなかったものの、あともう少しの所まで漕ぎ着けたのは大したものである。最後まで諦めず、このまま努力精進すれば、近い将来、必ずや達成できると確信している。

3. 外国語学習における「実践力」のつけかた

「実践力」とは、「より自然な表現」、「実社会での表現」を身につけること。これは、教室内の基本文型だけでは到底間に合わない。「相手がいて初めて会話が成り立つ」という点に注意するべきである。今、日常でよく用いるごく基本的な語を取り挙げる。

3.1. 相手との関係を構築

日本語の場合は、どちらともとれる「あいまい」表現が多い。「あいまい」の中から話者の真意をくみ取らねばならないのである（これに対し、中国語は具体的、直接的な表現が多い）。

(1) 「どうも」

「こんにちは」という挨拶に対する返事——「やあ、どうも（どうも、お久しぶりです）」

「お疲れ様」というねぎらいに対する返事——「あ、どうも」

「おめでとう」に対する返事——「ああ、どうも（ありがとう）」

「陳謝」のとき——「どうも（すみません）」

以上の如く、応酬語として用いる場合の「どうも」は、中国語では一般に“很;实在”を用いる。この「どうも」は「陳謝」と「お礼」の両方に用いられ、場面により使い分けをしなくてはならない。

(2) 「すみません」

正反対の用法があるので注意する必要がある。

「すみません」——（“借光！劳驾！”）

【陳謝】：「すみません」——「（本当に）すみません」（“实在对不起！”）

（“不好意思！”もよく使用。“对不起”よりやや軽い）

【お礼】：「ご親切にして戴いてすみません」——（“谢谢你的关照！”）

(3) 「ちょっと」

「ちょっと」も常用語であるが、幾つかの用法がある。基本意義は「少し」であるが、逆に「かなり（＝相当）」を示すこともある。最後の例が「相当」を表し、注意を要する。

- 呼びかけ——「ちょっと、すみません」（“喂,打听一下// 劳驾,请问一下!”）
「ちょっと、いいですか?」（“喂,打听一下!// 劳驾,请问一下!”）
- 相手に警告——「ちょっと、気をつけなさい」（“喂,当心!”）
- “一点=稍微”——「もうちょっとゆっくり話して下さい」（“请再慢一点儿说!”）
- “相当”——「私にとってはちょっと難しい」（“对我来说相当难!”）

(4) 「あのー」と「あの」

「あのー」の如く、語尾を伸ばした場合に注意すること。何かことがらを人に依頼する場合に用いることが多いからである。

3.2.日本語は「状態動詞」（～している）になることが多い

「状態」を表す「～している」と「動作」を表す「～する」では、意義がとうぜん異なる。

- (1) 「結婚していますか?」—— “结婚了吗?” / “成家了吗?”
- (2) 「なぜ、泣いているの?」—— “你怎么这样哭?”
- (3) 「習っていますよ」—— “这个语法学过吗?”
- (4) 「このことは知っていますか?」—— “这件事你知道吗?” / “这件事你晓得吗?”

以上、(1)～(4)の如く、日本語では多くの場合「～している」という「状態」を表す表現を使用するが、これに対応する中国語の動詞に付接するマーカーは“了”（「完了」表現）、“过”（「過去の経験」表現）であったり、または“哭”、“知道”、“晓得”の如く、標識無しとなる。即ち、動詞にいかなるマーカーも付接しない。

中国語入門段階における「動作・行為」の進行・持続は「動詞+助詞“着”」で表すと学んだであろう。しかしながら、実践上、つまり、実際には「～している」に対応する中国語は“V着”とは必ずしもならないのである。

3.3.外来語の使い分け

ひとくちに「外来語」と言っても、既に日本語として完全に機能しているものや、まだ定着途中段階のものもある。

- (1) 定着——既に日本語として根づいている。逆に、これらの外来語に対して、和語が急に想起できない人も多いのではないかと。とりわけ、若い年齢層には和語が出てこない傾向がある。

[例] スカート（これに対応する和語は既に無い。「洋袴」は死語である）[中国語“裙子”]、スリッパ（上履き）[中国語“拖鞋”]、カーテン（幕）[中国語“窗帘”]、ベッド（寝台）[中国語“床”]等。

- (2) 定着途中——日本語としては、まだ根づいていない。したがって、何の意義かわからない日本人もいる。とりわけ、パソコン用語など、年配者に理解できないことが多い。下記に挙げる片仮名語はほぼ定着。

[例]

- a : 「(PCを買ったところ) マウスが付いていない」
- b : 「(PCのアンチ・ウイルスをインストールしていなかったから) ウイルスにやられた」
- c : 「(今回のコンテストでは) 完全にアウェイでしょ?」〈この例では、既にサッカー以外にも盛んに用いられるようになっている〉

(3) 「使い分け」がある——「スープ」(西洋式、中国式)

「つゆ」(日本式) →→澄まし汁、みそ汁、うどんの汁など。

(4) カタカナ語は外来語とは限らない——特殊な意義を持たすため、また、他のものと区別するために片仮名を用いる。

[例] ケータイ(「携帯」とは明らかに用法が異なる)、キムタク、トヨタ、クボタなど。

3.4.他流試合をする

同じ言語を学ぶ者同士が「切磋琢磨」する意味で、他流試合をし、「井の中の蛙」状態から脱却する。

- (1) 外国語の全国弁論大会(スピーチコンテスト)に参加。
- (2) 外国語の検定試験を受験。
- (3) 外国語の強化合宿に参加、サークルの結成。
- (4) 大学祭で外国語劇を行う。
- (5) インターンとして現地企業に参加、外国企業などにアルバイト。
- (6) 現地へ留学など。
- (7) 様々なジャンルの読書をする。速読と精読の両方を行う。
- (8) 何か、特定のテーマを決めて読書をおこなう。例えば、金融危機、食品安全問題など。

4. 発想が異なる

日本語は中国語から漢字言語を輸入した結果、様々な語彙が日本語の中に定着した。ただし、中国語の文法に対しては拒否反応を示した。中国語の文法は日本語に根づかなかつたのである。

例えば中国語の大きな特徴に“量詞”がある。“量詞”は日本語では「助数詞」と訳されている。しかし、日本語に「専用の助数詞」が無い名詞も多い。例：“味儿、尿、虹、山、腸子、帽子、泥巴”など。これらを数えるための「専用の『助数詞』」は本語に存在しない。したがって、例えば「帽子」は「ひとつの帽子」などのように表現せざるを得ない。

日本語は「助数詞」は存在する。しかし、類別詞は存在しない。

中国語は量詞の中に数量詞(=助数詞)と類別詞の2種類が含まれる。

日本語	中国語
一頭の(シカ)	一头(鹿)
この本の道—— ×	这条路
この頭のシカ—— ×	这只鹿、这头鹿
この道	这路—— ?
このシカ	这鹿—— ?
ひとつりの刀—— (和語の「助数詞」)	一把刀

日本語は必ず「数詞」が必要である。数詞がないと日本語の文は成り立たない。したがって、数に重点がある。

中国語は名詞にどのようなものが位置するかに重点であり、数詞の有無は必ずしも重点ではない。つまり、“Zhe lu”だと“lu”は「道」であるのか「シカ」なのか不明となる(「道」も「シカ」も“lu”の同一発音とな

るからである)。したがって、一般には量詞“条”（細長いモノを数える）または“只；头”（動物を数える）を用いる。そして、後置する名詞を明らかに示す、つまり、「類別」する働きがある。

[資料]

高見澤孟2008, 「コミュニケーション能力のための教師の役割の研究」(第5回中日韓日本語教育研究フォーラム・レジュメ, 2008.8.22., 於: 大連外国語大学)

植田均2008, 「日本語の『助数詞』は中国語の“量詞”か?」, 『日本語文化研究』(第3輯) 所収, 大連大学出版社, 2008年。

*本稿は、2007年9月8日、福建師範大学・外国語学院で口頭発表したものに少し加筆した。当日、貴重なご意見を戴いた同大学外国語学院林璋教授、胡楨副教授をはじめ、臨席された教員関係各位に感謝致します。